



Title	カーレン・ブリクセン : 「詩人」にみるその文体(2)
Author(s)	岡田, 令子
Citation	IDUN. 1982, 6, p. 23-58
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95871
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

カーレン・ブリクセン
——「詩人」にみるその文体 (2) ——

岡 田 令 子

Karen Blixen: Her Symbolic Style (2)

Reiko Okada

The first half of this study is published in *the Osaka Gaidai Gakuho No. 44* (1979) with the same title.

Contents:

Sensual Expressions in the POET

1. visual sense
2. acoustic sense
3. odorous sense
4. others: a) tactile sense, b) sense of weight, c) flower

感覚的な表現について

1

視覚的な表現（色彩）:

H. C. Andersen の童話 *De røde Skoe* [赤い靴] は彼の傑作の1つであり、その物語の内容は深く彼の内的生活をも象徴的に表現するものである (cf. 拙稿「童話作品とユングの分析心理学——「赤い靴」」『大阪外国語大学中・北欧比較文化研究(→)』1980, p. 95,)。

この物語のタイトルには2つの要素——‘赤い’と‘靴’——からなっているが、いま赤いという色彩のみについて考えてみると、作品を読み終えたものには、赤い色が一般的に持っている、燃える焰、赤いバラ、血といった強い情熱、愛などを思い出させる象徴的な価値の他に、H. C. Andersen の強烈で奔放なエロス、生命力、血気、激しい恋と失恋の痛みなど、彼の一連の強い興奮を感じるのである。このように赤一色を取りあげても、色は読者に果てしない連想をもたらし、また色彩に限りなく豊かな意味内容を含ませることも可能である。文学作品の中で色彩がもたらす効果はひとり H. C. Andersen のものではなく、鋭い色彩感覚の持主であった Karen Blixen によっても非常に好んで用いられたのである。どれ程好んで用いられたか、また、どのような色彩があらわれ、それらがどのように描写を美しくし、物語の内容とかかわっているかなどを、彼女の作品、「詩人」の中でみてゆきたい。

そこで、色彩に関して、作品内容や人間の内的世界と深く関わる、興味深いと思われる表現や美しい自然描写のいくつかを、物語のすじにそって出てくる順に記述し、説明を加える。なお例としてあげる1～10の箇所の中には以前の小論——「詩人」にみるその文体(1)——であげたものもまじっている。(以下引用文のあとの数字はテキスト「詩人」(*Syv fantastiske Fortællinger*, Gyldendal, 1969, pp. 333—392) の頁を示す。)

1. blaa→lysegraa, grøn〔青→うすい灰色、緑〕

…Folk, der havde kendt ham som ung, sagde, at han var vendt hjem med andre Øjne. Før havde de været blaa, men efter hans Hjemkomst var de lysegraa eller grønne. (338)

〔彼の若い時を知っている人々は、彼は違った目をして帰って来た、といった。以前は青色だったのが、帰国後はうすい灰色か緑だった。〕

フランスやドイツでの留学生活を経て帰国した青年は、内的な経験を深め、大人になり、成熟したことを指すのであろう。髪の色や目の色の描写は一般に個々の人間の身体的特徴とされるが、他の作品でも Blixen は内的変化を目の色で表している。⁽¹⁾

2. gul, Regnbue [黄色, 虹の色]

Maaske er der for Herrnhuter Troldom i en gul Stedmoderblomst eller i Luften under en dobbelt Regnbue. (342)

〔多分、黄色のパンジーとか二重の虹のかかった大気の中にはヘルンフータ派の婦人にとっては何か魔力があるのだろう。〕⁽²⁾

恋にやぶれた少女が手折る、まっ黄色のパンジー。その色は強い嫉妬の色なのだろうか。それを彼女がマチーセンの胸につけるのを見てから夫人は気が狂ってしまう。二重の虹というところにも、鏡の役目を果している大気中の水蒸気⁽³⁾の存在を想像させ、鏡のテーマを追求する作家の意図をふと見せているとも考えられる。(昔から鏡には魔力があるともいわれている。)

3. (Sørgedragten) → lysegraa (Kaabe), lyseblaa (Hat), grønt (Træ) [喪服→うすい灰色のケープ, うすい青色の帽子, 緑の木]

Hun havde for første Gang lagt Sørgedragten, da det nu var et Aar siden, at hendes gamle Mand var død, og var i en lysegraa Kaabe og en lyseblaa Hat. Hun var saa lykkelig som en Ringdue i et grønt Træ, ... (345—6)

〔彼女は主人が死んで丁度1年経ったので、はじめて喪服をぬぎ、うすい灰色のケープを着て、うすい青色の帽子をかぶっていた。彼女は緑の木にとまっている森鳩のように幸福だった。〕

人は悲しみの時に黒い喪服を着てその心の中を他の人にも知ってもらいが、フランシーネは、うすい灰色と青色の服装で喪が明けたことを告げる。そのよろこびは緑色で表されている。

4. farveløs, Fornægtelse af al Farve, Farvetoner, Dagens Farverigdom, Iergraa, farveløse Verden [無色, すべての色の否定, 色調, 日中の色彩の豊かさ, ねんどの灰色, 無色の世界]

Det var i den Time lige før Solopgang, hvori Verden synes ganske farveløs, ja, hvori den ligger som en Fornægtelse af al Farve. Nattens rige Farvetoner er forsvundne, har trukket sig tilbage som Bølgerne fra en Kyst under Ebbe, og Dagens Farverigdom slumrer endnu i Landskabet, ligesom Farverne i Pottemagerleret, der alle er Iergraa, indtil de kommer frem i Brændeovnen. Og denne farveløse Verden indeholder et mægtigt Løfte, en alvorsfuld, henrykkende Forjættelse. (350)

〔丁度日が昇る前の時刻だった。その時、世界は完全に無色のようであり、本当に全色彩を否定するかのよう横たわっていた。夜の豊かな色調は失われて、まるで海辺の干潮のように引いてしまい、日中の豊かな色彩は、陶器づくりのねんどの中の色のよう、いまだ風景の中にねむりつづけていた、ちょうどその色はかまどの中で色がつくまえに、すべてがねんどの灰色であるかのように。そして、この無色の世界は非常に大きな約束、一つの大事なよろこばしい約束ごとを秘めていた。〕

夜明け前の美しい自然描写であるが、色のないことをかまどに入れられ美しい色彩をおびる前のねんどにたとえている比喩は面白く、この大自然に約束が含まれているとするとところなど、どのような約束ごとなのか読者

の心をそそる。この景色をみている物語の主人公マチャーセンが考え出す彼の結婚計画をさすのだろうか。

5. graa (i sin Kappe), 〔灰色〕

Den gamle Mand, selv graa i sin Kappe, vilde have været saa godt som usynlig, ... Han følte sig ogsaa selv ubeskrivelig ensom, som om han havde vidst, at han virkelig var usynlig. (350)

〔自分から灰色のマントに身をつつんでいるこの老人はほとんど姿が見えなかった…。あたかも本当に自分の姿がみえないのだと知ってでもいたかのように、自分でも描写できない程淋しかった。〕

前の4からの続きであるが、色彩のない夜明け前の自然、それと保護色のように灰色のマントをきたマチャーセン、他人にみられないことは他人との関係が全くないことであり、それ故におこる心の中の淋しさを灰色と巧妙に組合せているところが興味深い。

6. glasklare (Morgenluft), røde (Teglstenstage), blaa (Røg)
〔ガラスのように澄んだ空気、赤い屋根瓦、青い煙〕

I den blikstille, glasklare Morgenluft laa Hirschholm som en By paa Havsens Bund. De røde Teglstenstage hævede sig, det ene bagved det andet, som Rev af mørkere og lys Koral. Den blaa Røg steg tilvejs som lange tynde Tangranker, der strækker sig mod Overfladen. ⁽⁴⁾(353)

〔一つの動きもなく、ガラスのように澄みきった朝の空気の中に横たわるヒルシュホルムの町は、あたかも海底の町のような。赤い屋根のタイルが浮かび上って重なりあう様はまるで色の濃かったり薄かったりするサンゴ、空に立ちのぼる青い煙は、海面に向かってゆら

いでいる海草のようである。]

地上にみられる風景を、海底の中の有様と対照的に比較する比喩は、この箇所ばかりではなく、他にも見られるのである。例えばテキスト「詩人」の373, 390頁や、テキスト『アフリカの農園』の176頁にもみられる。アフリカの早朝の空気の中をドライブする作者は、この時にも自分たち⁽⁵⁾がまるで海中に行くようだと書いている。陸上のことがらをすぐさま海中のこととがらと結びつけるところに、この作家の想像力の特異さと、奇抜さがある。(それは意識の世界がすぐに無意識の世界と通じ合い、同じ位に両方が透明なことの証明といえるかも知れないのだが。) また、デンマーク特有の赤屋根をみて、海中のサンゴを、青い煙をみて海草を思う、美しい色の世界が水面を鏡にして上と下で同時に描き出されるという実像と映像の総和を読者に楽しませてくれる。

7. graa (Regn), grønne (Skove) [灰色の雨, 緑の森]

Nu sprang Skoven ud. Den blide, tætte, graa Regn faldt i nogle Dage omkring hele Verden som Sløret omkring en Brud, og der kom en Dag, hvor alle Skove stod grønne. (354)

〔優しく霞んだ灰色の雨がいく日か花嫁をつつむベールのように降りそそぐ、するとある日、森はすっかり緑色になっている。〕

5月の上旬、唐突として春のおとずれを知らせてくれる森の新芽であるが、その前にふりそそぐ春雨のやさしさを灰色とし、花嫁のベールにたとえる、作者のいかにも女性的な感覚がうかがえる。雨のもたらす春の喜びと、花嫁の中にただよう幸福感を表現したこの箇所は自然描写の中でも最も女性的で美しい描写である。

8. blaa, dunkle, grønt, Skygge, Dagens Farver, Dagslys, Farveverden [青, 暗い, 緑, 陰, 日中の色, 昼間の光, 色の世界]

Denne Sommernats Himmel var uendelig klar, og saa ren og roligt blaa som en Vinkas Blomsterblade.....Det lange, vaade, dunkle Græs var lysende, livfuldt grønt, som Juveler i Skygge. Alle Dagens Farver laa i dette Landskab, ikke mindre stærkt end ved Dagslys, men anderledes, som om de nu udtrykte en ny Side af deres Væsen, som om den hele Farveverden var blevet sat om fra Dur til Mol. (377)

〔夏の夜空は限りなく澄み切って、日々草の葉のようにすっきりと落ちついた青色をしている。…長くてしっとりと黒ずんだ草は影にひそむ宝石のように光って、水みずしい緑をしている。この風景の中には、日中の色彩のすべてがひそんでいて、昼間の光にあたるのとおとらず力強いが、異ったものでそれらが、まるで新しい生存の一面を今、表現しているかのようであり、丁度それは全色彩の世界が長調から短調へと切りかえられたかのようである。〕

これもすぐれた自然描写の一つである。明るく楽しい陽気な色彩を昼の色とすれば、夜はそれに反して暗く、淋しく陰気な色として感じとられているが、存在の陰陽両方に同じ価値観をもたせている作者の思考法は、海上のものをすぐに海底の何かにとたえうる想像力とも相まって、作家のすごい洞察力を示すものであろう。昼と夜の色彩の世界のイメージは、また、ぴったりと長調と短調という音の世界として比喩的にとらえられている。

9. blanke (Skive), Guldbro, jerngraa (Flade), gyldne (Fisk)

〔輝く月面、金の橋、鉄灰色の表面、金色の魚〕

Dens blanke Skive slog en smal Guldbro tværs over Søens jerngraa Flade, som om en Stime af mange Hundrede smaa, gyldne Fisk legede i Overfladen, ... (377)

〔輝く満月は湖の鉄灰色の面を横ぎって一本の細い金の橋をかけていた。それはあたかも何百匹という小さな金色の魚の群が湖面でたわむれているようであった。〕

これも夏の夜空にかかる月と、金色に輝く湖上の有様を、遊ぶ金色の小魚としてとらえ、読者に黄金色の満月の夜の美しさを彷彿とさせる。しかし、この完璧な美しさは、物語の中で、これからおこる流血の悲劇舞台となるようにしつらえられたものである。

10. ildrød (Lue) 〔焰の赤色をした鬼火〕

“.... —Se nu Dit Haar, det er som et Udraabstegn, som vi Digtere sikkerlig kan have Brug for, en lille, ildrød Lue, en Lygtemand til at vise Folk den gale Vej, den snævre Vej, som fører til Helvede.” (384)

〔「お前の髪をちょっと見てごらん。まるでわれわれ詩人がきっと使えそうな感嘆符みたいだよ。燃える赤色の小さな炎、人間をよからぬ道、地獄へつづく狭い道へとさそう鬼火だよ。〕

このシーンでは、黒いマントを着てまるで魔女のようにみえるフランシーネの髪を指さして、酒に酔いつぶれた青年詩人アナスが口からでまかせに話しているところである。物語の進展の中でこの会話をみる時、赤い髪は彼女の彼に対する激しい愛を表してはいるが、彼の方はそれ故に、その髪に一種の悪魔的なものを感じている様子と、疑いをもつ様子がえがき出されている。物語の結末に来て赤髪のこの女性は恋人アナスの愛（マチーセンを射ったこと）に呼応して、次の日結婚することになっている婚約者マチーセンを石で打って殺してしまうことになる。

以上、作品中にみられる多くの色彩描写の中から10カ所を取り上げ、どのような色彩がどのように用いられているかを具体的に示したが、これら

の例から見る限りでは、ある色彩が一つの定まった何かを表すといった風には作品の内容と関わっていないようである。ただ、彼女の小品 'En blaa Historie' [一つの青い物語] や 'De blaa Øjne' [青い眼] などからみる限り、青は彼女にとって、全世界を表す重要な色であることはまちがいない。⁽⁶⁾しかし、今一つうすい灰色を取り上げてみると、例1では、未経験の若さから苦労を積んだ人生経験を象徴する色と思われ、例3では黒から着がえたよろこびの色であり、例4では今はまだろんでいてははっきりしないが、何か約束を包みかくしている未知の色である。例5では自然と同色なるが故に他の人にみえない、他との人間関係をつくれない孤独な人間の色とみられ、例7では美しく優しい心あたたまる雨の色、例9では黄金の月光を反射する最高の美——湖面の色となるなど、他との関係、周囲の状況によって一つの色が種々の意味あいをおびている。

この他作品中に、はっきりと形容詞、名詞、動詞の形で表現される色彩は大きく分けて10色で、決して多いとは云えない。⁽⁷⁾この10色を更に詳しくみてみると、rød [赤] の中にも lyserød [うす赤] がある他、rosenrød [バラ色]、例6にみたように Korall [サンゴの赤色] や、blodrød [血の赤]、例10にみる ildrød [炎の赤] などがあり、青の中には単なる blaa [青] と mørkeblaa [濃い青]、lyseblaa [うすい青]、himmelblaa [空色] がみられる。同じように前述の graa [灰色] をとってみても、lergraa [ねんどの灰色]、tingraa [錫の灰色]、jerngraa [鉄の灰色]、と鉱物にみられる灰色に分かれている。hvid [白] においても kalkhvid [しっくい] の白、sølvhvid [銀の白]、mælk hvid [ミルクの白] とニュアンスの違いがある。

異なる色彩の描写は当然作家の光と影に関する感覚に通ずるものである。この作品には明確な色の名称を与えられないが、色彩と光に関する表現となって、各所に散在している（約50カ所）。それらの中には、mange farvede [多くの色]、Farverigdom [色彩の豊かさ]、Alle Dagens Farver [日中のすべての色彩]、hele Farveverden [全色彩の世界] などの

表現がある（8カ所）。血の気の引いた蒼白を表す *bleg*（7カ所），*farveløs*〔無色〕といった表現もある（3カ所）。透明度に関するものとしては *klar*〔澄んだ〕，*sølvklar*〔銀色に澄んだ〕，*glasklar*〔ガラスのように透き通った〕があるかと思うと，*blank*〔きらきら輝く，艶のある〕がみられ（9カ所），光そのもののあるなしを示す *lys*，*Skygge*，*mørk*，*Mørke*，*dunkel*〔明るい，影，暗い，闇，暗黒の〕も多くみられる（23カ所）。

はっきりと色彩の名称で描写している場合と後のグループにまとめたように一般の色と光に関する描写の両者を合せると，非常に数にのぼり，ざっとみても各頁に2～3カ所これらの表現があることになる。

Blixen の私信 (*Breve fra Afrika*) 1925—31（1926年4月1日付など）にもみられるように，光と影，光と闇あるいはそれらの象徴する意識と無意識の世界に極めて敏感で深い観察の目をむけていることがわかる。この色彩と光に対する鋭い視覚感覚は，例8でみたように，直ちに音の感覚とも結びつき，美事な比喩となってくる。

色彩において見られる彼女の特徴は暖かい色から中間色，寒い色にまで及び，多彩から無色までと幅広く，使用された色が一様に分布している。しかしどちらかといえば，冷たい色の量が多いようである。

Blixen は画家になろうと 娘時代に美術学校へ通ったこともあったが，結局，画家としては最高の芸術作品を残すことができないとわかったとき，彼女は，文筆をもって，外界の美を伝えることに成功したばかりではなく，内的世界の美しさをも象徴という技法で表現することができた。しかし，この技法は彼女のすぐれた天分から生れたものであるためか，少しもごこちなさを感じさせないもので，泉のように湧き出る想像力によって流れでてきたもの，という印象を与えるのである。

（以下，色彩についての描写を一覧表にまとめておく。）

A グループ

	色 彩	描 写 さ れ た 事 物	度数
1	赤 (rød) koralrød 〔サンゴ色〕 blodrød 〔血 の 色〕 ildrød 〔炎 の 色〕 mørkerød 〔濃 い 赤〕 lyserød 〔うすい赤〕 rosenrød 〔バラ 色〕 (動) rødme 〔顔をあか らめる〕	ユダの髪の毛, 屋根のタイル 屋根のタイル 田舎の子供たち, 血 鬼火, 髪の毛 髪, 屋根のタイル アネモネ, 帽子, 頬, 服, ライラック 顔 フランシーネ	19
2	白 (hvid) kalkhvid 〔石 灰 色〕 sølvhvid 〔銀 白 色〕 mælkhvid 〔乳 白 色〕 hvidglødende 〔白く輝く〕	カーテン, ライラック, ねずみ, コート, 魔法, 牝牛, 夜着, 牛, 丸いもの, マチ ーセンの好きなもの 裁判所の記録室 鏡 壁 鉄の鍵	14
3	黒 (sort) (動) sortne 〔真暗になる〕	眉, まつげ, 靴ひも, 手袋, とらわれ人, ケープ, 穴 目の前	11
4	緑 (grøn) foraarsgrøn 〔春の緑〕 gyldengrøn 〔金 緑〕 (動) grønne 〔緑になる〕	眼, 風景, 森, 庭, 草 大地 光 あたりの風景	9
5	青 (blaa) mørkeblaa 〔濃 紺〕 lyseblaa 〔うすい青〕 himmelblaa 〔空 色〕	眼, 煙, 池, 空, 夏の夜空, 服, 帽子 戸, 部屋, 眼 服, 空, 海 庭に面した部屋, 部屋	10

6	灰色 (graa) lysegraa〔うすい灰色〕 lergraa 〔ねんど色〕 tingraa 〔錫 色〕 jerngraa 〔鉄 灰 色〕	浪, マント, ケープ 眼, ケープ 陶器作りの材料 (ねんど) 柱 湖面	8
7	黄色 (gul)	パンジー, 蝶, 光	6
8	金色 (guld)	帽子, 夕方の光, 橋, 魚の群	4
9	銀色 (sølv)	雲, 鏡の中の姿, スンド海峡	3
10	茶色 (brun)	馬, 帆	2
計			86

B グループ

	色 彩	描 写 さ れ た 事 物	度数
1	闇 (mørk) halvmørk 〔うす暗い〕	木々や下生えの間, 葉, 人の姿, 眼, 髪, 木の頂き 広闇	14
2	透明・明るい (klar) sølvklar 〔銀色の明るい〕	眼, 光, 夏の夜空, 水たまり, 朝の空気, 馬, 月の表面 鏡の中の姿	9
3	光と影 (Lys og Skygge)	ライラック, 顔, 髪, 宝石, 白樺の木	9
4	色彩 (mange Farver)	ねんど, 日中の色, 部屋, 金色の世界, 空の色, トルコ服, 昼の色	8
5	青ざめた (bleg) dødbleg 〔死のように 青ざめた〕	フランシーネ, アナス, 2 人の子供, 庭 向きの部屋 死体	7

6	色なし (farveløst) Farveløshed [色のないこと]	世界, 色の否定 世界, 色の否定	3
			計 50

A・B総計 136

この物語の中には色彩の数々が散らばっており、あるものは比喩として物語の内容と深くかかわっていたことをこの項で考察したが、次の項では、視覚以外の感覚表現のいくつかにも検討を加えてみたい。

(注)

- (1) hans unge Ansigt blev blegere, og hans Øjne mørkere end før, (cf. 'Pisa', Den unge Dames Sorg, 25.) 心の重い男装の 아우ネーセの目の色を表すところがある。
- (2) キリスト教新教の一派, 1722年ドイツに始まる。
- (3) cf. 'Pisa' では鏡が大きなテーマの一つになっている。
- (4) cf. 「コペンハーゲンの会話」 拙論「カーレン・ブリクセン——詩人の使命——Heretica との関係において」(大阪外国語大学学報 第41号, 1978), 「詩人」にみるその文体(1) (上記学報第44号, 1979), 5.(I) “人形”。
- (5) 友人のデニスと作者をさす。
- (6) cf. 拙論「カーネーションをつけた若い男」にみる 文学観(前出学報 33号, 1975), 154—155。
- (7) cf. 小林英夫著作集 6『文体論論考』, 217—8, イタリア女流作家ネグリの色彩を考察してその数, 68色をあげている。

2

聴覚的な表現：

音に関する表現は色彩に関するものに比してずっと少ないが、それでも20箇所ばかりを拾いあげることができた。物語の初めでは春の到来を告げるナイチンゲールの鳴声や (349)、マチーセンの心をおどらせる、オルゴールから出るマズルカのメロディーが美しい (350, 351)。人は森に出て歌い (354)、アナスの作詩の中ではあるが、風の音までがソロやオーケストラを奏でる (370)。静かな空気をかすかに震わせる 蜜蜂のブンブンという羽音が聞こえるかと思うと (374)、老マチーセンのはるか昔の思い出の中には、一緒に堅信礼の準備をした少女の息づかいなどがもどってくる (380)。フランシーネの笑いは恋人アナスとの楽しい会話の中でうきうきした雰囲気をかもし出す (381)。

しかし、マチーセンがアナスの銃に射たれてからは楽しい音の世界は一変し、彼のあえぎが聞こえ (387)、彼の耳には犬のなき声がきこえる (388)。誰かが泣いている、その声が行ったり来たりしている (389)。彼自身、何度か声を出そうとするが、声もでない (391)。

あらゆる色彩を抱擁した灰色、無色などに描かれた日の出前の色彩描写とは全く反対に、マチーセンの色の世界が暗くなった (sortne) 時、音の世界でも自分では声がない、無声の状態に追いこまれる。これで物語はいよいよ終りに近づいて来たことがわかる。

いまいまいげに叫ばれたフランシーネの“あんた、詩人ね！”という言葉が闇の中で聞こえるだけである。このように変化する音の世界を辿ることによっても、物語の発展経路が明確に表示されている。次にもう少し詳しく、いくつかの比喩的な表現を取りあげ、前項のように説明を加えてみたい。

1. Nattergalen [ナイチンゲール]

Nattergalen kom, og forvandlede hele Verden til en Violin,
...(349)

[ナイチンゲールがやって来て、全世界を一つのヴァイオリンに変えた、…]

楽しい緑の森で歌うこの鳥の鳴き声があちこちからきこえてくると、世界中が一つの楽器になったというオーヴァーとも思える表現は、美事な隠喩の一つであろう。

2. Vindene [風の音]

...og Vindene spillede paa Fløjte og Basuner, af og til Solo,
af og til samledes de igen i store Orkestre. (370)

[風が横笛やバスーンにたわむれ、時にはソロを、また時には大きなオーケストラを奏でる。]

森や野原について詩をかいいたアナスは、フランシーネが他の男と結婚することを知ってから、海の事について詩をかこうとする。この箇所はこれからつくろうとする詩の中で聞こえる音である。

3. Trio [三重奏]

I Dage og Ugevis levede denne Trio, selv naar de drak
The i den grønne Have paa Friheden, i store himmelske
Haves Dybder. (373)

[3人がリベルテ荘の緑の庭でお茶を飲んでいる時でさえ、何日も何週間も彼らは広大な果てしない海の底で暮らしていた。]

これは色彩の項でも述べるべき箇所であり、また緑の庭を大海原の海底にたとえる比喩として取り上げても適当なのであるが、3人というところを Trio [トリオ] と音楽的表現を用いている。前項であげたように、昼と夜の色彩の世界を長調から短調へ……という音楽的表現を用いて言いかえる他、Rytme [リズム]、Toneart [音調] など音楽に関する語もあちこちにみえている。

4. Skovdue [森鳩]

Saa lo Fransine lykkeligt, blidt og sagte, som en Skovdue kurrer. (381)

〔そしてフランシーネは楽しそうに、やさしく、もの静かに、一羽の森鳩がクックと鳴くように笑った。〕

楽しそうに、喪服から春らしいす色の服に着がえた女性は森鳩にたとえられたが (cf. 前項「色彩」3)，またここでその笑い方を 鳩がなくようだとしている。

5. Ekko [こだま]

Og hele Tiden, som et Ekko, der i det opslugende Mørke bølgede og rullede i lange Huler, slog hendes sidste Ord ham atter og atter i Møde fra alle Sider. (392)

〔いつまでも彼女の最後の言葉がまるですべてを呑み込んでしまうまっ暗な長い穴の中で、波うちころげまわるこだまのように、まわり全体から何度も何度も彼 (マチーセン) にぶつかってきた。〕

ゲーテのワイマールにも似た、小さな楽園をデンマークの片田舎にうちたてようとした枢密顧問官マチーセンは、瀕死の状態であるが、今はワイマールの詩の世界にいたいと思っている。そして、石で打ち、最期のとどめ

をさした婚約者フランシーネの叫び声を暗闇の穴の中で聞きながら死んでゆく。

ここでこの物語のテーマをもう一度考えてみると（cf. 「詩人」にみるその文体⁽¹⁾」, 4), マリオネットである人間マチーセンが、若い2人の恋人たちを自ら操ろうとしたその復しゅうは死であった。それも恋人たちによって死に向わされたのであるが、その最期のシーンにこだまに代表される音の世界が出てきたといえる。実体のあるような、また、ないような音——こだま——に人生、死、運命といったものを象徴させているのか、作家 Blixen の意図は読者には推測の域を出ないのである。しかし、マチーセンが何度も何度も穴の壁にぶつかる“あんた、詩人ね！”というこだまを聞きながら意識の世界に別れを告げたことと、暗闇という色彩の世界を呼応させて悲劇の終結を巧妙に、また極めて象徴的に表現していると思う。

(注)

- (1) 「われわれ人間はマリオネット人形である。その劇で何より大事なことは作家の一神の一意図をはっきりさせておくことである。」（cf. ‘ピサ’, *Syv fantastiske Fortællinger*, p.40.）

3

嗅覚的な表現：

匂い（臭）に関する描写は少なくとも20箇所はあり、この度数は色彩描写に比してはほぼ同数だが、音に関するものとはほぼ同数である。

この嗅覚に関する描写の中には春の自然描写が多く、木々、草花、野原や空気、風といったものからなっている。動物（牛）の臭いや、その糞が哲学的な意見とからませて出てきたりもする。また、間接ではあるがかぎ煙草の匂いなどは読者が容易に想像できるような書き振りになっている。

それでは以下に Blixen が重要視した空気、風をはじめ草木、糞の描写と比喩のいくつかの例をあげて説明を加え、最後に20例の一覧表をつけ加えることにする。(例文の番号は46～47頁に添付した表の中のものと一致する。)

1. Luften 〔大気〕

..., men det regnede, Luften fyldtes med Duft og Jorden med Grøde, ... (349)

〔…しかし雨が降って、大気は芳香で、大地は生命力が満たされていた。〕

大気は視覚的にとらえることは困難であり、Blixen は常にそれを嗅覚と共に感知しようとする。ここでは Luften 〔大気〕と Jorden 〔大地〕と並べて宇宙の二大要素を描写し、その豊かさを先ず、雨——水の要素——の中に打ち出す。匂いに関心のないものであれば、自然描写は木、草花にとどまり、この視覚的なものの描写だけに終わったかも知れないのである。

2. Luften 〔大気〕

Den klare dunkle Luft var fyldt med sød og syrlig Duft af vaadt, friskt Løv. (349)

〔その澄んだうす暗い大気は、濡れて新鮮な木の葉の甘酢っぱい香りで一ぱいだった。〕

ここでは大気に香りを与えた木の葉が濡れているという触覚的な表現をもともっており、あらゆる感覚的な描写を網羅していることがわかる。

3. Luften〔空気〕

Luften under Træets Grene var mættet med gyldengrønt levende Lys, Lindeblomsternes honningsøde Duft og utallige Biers Summen. (374)

〔枝の下の空気は金緑色の生き生きした光と、しなの木の花の蜜のように甘い香りと、無数の蜜蜂のブンブンという音で一ぱいであった。〕

匂いがあたりの Lys〔光〕の様子と共に描写され、当然それらすべてを包んでいる大気がある。光と影（陰）もまた Blixen の大きな関心であることはすでに述べた。

4. Morgenluften〔朝の大気〕

Den styrkende, bevægende Duft af Poplernes lodne tjavsede Blomster blev optaget i Morgenluftens rige Harmoni. (349—50)

〔ポプラの毛のある小さな花からくる清々しくかきたてるような香りが、朝の大気とよく調和していた。〕

styrke は疲れたものを再び新鮮にする、力を与える (Eng. refresh) の意を表す動詞、bevæge は動く、活動する (Eng. move, stir) などを表す動詞であるが、その2つの動作の進行を示す現在分詞形で用いられている点、朝の大気の香を形容するにふさわしい。

5. Aftenluften〔夕べの大気〕

I den klare sødt duftende Aftenluft følte hun sit eget Legeme saa stærkt og let som et ungt Birketræ, ... (376)

〔この澄み切った、甘い香りのする夕べの大気の中で彼女（フランシーネ）は自分の体がまるで白樺の若木のように強く、軽やかだと感じた。〕

アフリカの高原での生活中、空気は最も重要な要素だと強調している Blixen は、ここでも、夕べの大気を klar, sødt duftende 〔澄んで、甘い香りを放つ〕と形容し、その中で1人の女性が感じる体を1本の若木に譬えるのである。すでに比喩のところ「「詩人」にみるその文体(1)」III, iv) に入れたが、また、再びここで朝の空気の次に入れて、夕べの空気と比較させた。

これはフランシーネが、恋人アナスが夢の中で彼女をみたと話すのを聞いている時の感じを述べた箇所である。

6. Vinde 〔風〕

Balsamiske Vinde strøg tæt hen over Jorden. (389)

〔バルサム（ほうせんか）の香りのする風が大地をすれすれになでていった。〕

大気の動きは、この文では風として触覚的にとらえられ、それがバルサム（ほうせんか）の香を運んでくる様が balsamiske Vinde 〔バルサムの香りのする〕と風の形容詞として表現されている。人の頭でもなでるようにさっと通り過ぎる風の様子は strøg (stryge の過去形) と擬人化された描写になっている。

7. Anemoner 〔アネモネ〕

...Anemoner, ..., med fingrede Blade og sød og bitter Duft. (349)

〔指のような葉っぱと甘にがい匂いのするアネモネ。〕

ぶなの木の下に広げられた1枚の絨毯のように咲くピンクや白の野生の小さなアネモネ。それにも目をやった作者は、ここでもまかく香りの描写を試みる。

8. Jasminer [ジャスミン]

Den kvælende, bitre og søde Duft...(365)

〔むせぶようなにが甘い香り…〕

これは来客（マチーセン）を待つフランシーネが活けた大きなジャスミンの花束からの香りである。

9. Kløver [クローバ]

Han følte den drivvaade, tunge, honningsøde Kløver slaa frem mod sine Skinneben. (378)

〔彼（マチーセン）はしっとりと濡れて重い、蜜の甘い香りのするクローバが向うずねにあたるのを感じた。〕

明日は結婚式という前夜、散歩に出たマチーセンが、どうしたことが50年も昔、子守がうたってくれたドロボーのうたを思い出す。空を見ると月が死を警告している、Memento Mori と。想像と思い出の世界にひたっているマチーセンに現実がぶつかってくる。それがこのクローバである。そのクローバを形容する語が触覚的なもの、重量感を与えるものと香りの3つである。

10. Linde [しなの木]

..., han kunde mærke deres rige, ambrosiske Duft. (386)

〔彼は、しなの木の豊潤な神々しい芳香に気づくことができた。〕

大地にたおれ、吐息をつくマチャーセンの口は土で一ぱいだが、それでもワイマールにいと彼は思っている。ambrosisk (Eng. divine) 〔神々しい〕という形容詞はこの彼の想像の世界の中では極めて的確にしなの木の匂いにつけられた形容詞だと思われる。

11. Snustobak 〔かぎ煙草〕

Justitsraaden trak sin Snustobaksdaase op og tog sig en Pris. Under Nydelsen heraf rynkedes hans fine Næse ganske lidt sammen. (353)

〔枢密顧問官はかぎ煙草の缶を出して、一つまみ取った。それをかいている間、彼のきれいな鼻をほんの少ししわ寄せた。〕

マチャーセンが自分とフランシーネが結婚し、2人を悲しませることで、詩人アナスがそこから良い詩をつくり出すだろうか……など考えている時の動作として、このかぎ煙草を取り出すシーンが描写されている。

12. Møget 〔糞〕

“.... Møget paa Møddingen, det skal I ikke rynke paa Næsen af, det er Køernes sande Væsen, ...” (382)

〔ごみだめの糞、おまえたちはそれを軽蔑してはならないのだ、それこそ牛たちの真の存在…〕

上の11と同じく鼻を rynke 〔しわをよせる〕するのだが、前のはいい香りに酔う為であり、この牛の排出物にはいやな臭に対する動作であるが、それをも含めて存在の真の姿を把握しようとする Blixen の生き方をここでおわせているように思える。

13. Kappe [マント]

Hendes mørke Haar hang ned som en levende, duftende Kappe, og i dets Ramme var hendes Ansigt køligt og dugget i Natteluften, som en hvid Rose. (381)

〔彼女の黒髪は生き生きと芳香を放つマントのように垂れ下っていて、その髪型の中で彼女の顔はちょうど一輪の白バラのように夜の大气の中で冷たく露にぬれていた。〕

マントが芳香を放つものとして形容されているのは、まだマチーセンが射たれる前に、フランシーネとアナスが語り合うのを遠くからみている時のことである。この en Kappe [マント] は仮面の象徴として提示され、その仮面がいまだ健在で、生き生きと機能を果していると考えられるが、次の例をみてみよう。

14. Dominoen [ドミノ仮装衣]

Da hun lod Dominoen fra Neapel falde, havde hun sammen med den bortkastet sin Skønheds yndige og duftende Krans af Roser og Liljer, der havde betydet alt for hende. (390)

〔ナポリ製のケープをぬぎすてた時、それと共に今まで彼女にとってすべてであったバラとユリで出来た美人の優雅なかぐわしい花輪を捨ててしまったのである。〕

ここでは、彼女がアナスと口論の後に家に帰り、そのイタリア風の風変わりな夜のマントを取った時の様子である。仮面をぬぎ捨て真実の彼女が現れる。

嗅覚的な表現を以下図表にしてみた：

テーマ	テキスト 頁	引用 番号	主 体	香 り の 種 類
大 気 (空 気) ・ 風	349	1	Luften 〔大気〕	(fyldtes med) Duft 〔芳香にみち ている〕
	349	2	Den klare dunkle Luft 〔澄んだ暗い大気〕	(fyldt med) sød og syrlig Duft af vaadt, friskt Løv. 〔濡れ て新鮮な木の葉の甘酢っぱい香り〕
	374	3	Luften under Træets Grene 〔木の枝の空気〕	Lindeblomsternes honningsøde Duft 〔しなの木の花の蜜のよう に甘い香り〕
	349 350	4	Morgenluft 〔朝の大気〕	Den styrkende, bevægende Duft af Poplernes (lodne tjavsede) Blomster 〔ポプラの清々しくか きたてるような香り〕
	376	5	Aftenluft 〔夕べの大気〕	klare sødt duftende 〔澄み切っ た, 甘い香りのする〕
	389	6	Vinde 〔風〕	Balsamiske 〔バルサムの香りの する〕
草 ・ 木 ・ 花	349	7	Anemoner 〔アネモネ〕	sød og bitter Duft 〔甘にがい香り〕
	349	*	Markerne 〔野原〕	Duften (fra) 〔芳香〕
	349	*	En Allé 〔並木道〕	af Balsam (popler) 〔バルサムポ プラの〕
	354	*	under Egetræ (檜の木の 下)	Duften (derinde) 〔芳香〕
	365	8	Jasminer 〔ジャスミン〕	kvælende, bitre og søde Duft 〔むせぶような, にが甘い香り〕
	378	9	Kløver 〔クローバ〕	hønningsøde 〔蜜の甘い香りのす る〕

	385	*	blomstrende Kløver 〔花をつけたクローバ〕	dufte overvældende stærkt 〔とてもきついいにおいがする〕
	386	10	Lindetræ 〔しなの木〕	rige, ambrosiske Duft 〔豊潤な神々しい芳香〕
煙 草	353	11	en Pris fra Snustobaks- daase 〔かぎ煙草〕	(hans fine Næse rynkedes) 〔鼻にしわよせる〕
牛 (その 糞)	379	*	Køer 〔牛たち〕	varme søde Duft 〔あたたかく、 甘いにおい〕
	382	12	Møget paa Møddingen 〔ごみだめの糞〕	(rynke paa Næsen af) 〔鼻にし わよせ軽蔑する〕
フ ラ ン シ ー ネ に 関 す る 比 喩	366	*	Blik fra F's mørke Øjne 〔黒い瞳からの一瞥〕	smægtende... livfuldt ligesom Jasminernes Duft 〔切望するよ うなぶんぶんするジャスミンの香 り〕
	381	13	hendes mørke Haar 〔彼女の黒い髪〕	en levende duftende Kappe 〔生き生きと芳香を放つマント〕
	390	14	Dominoen fra Neapel 〔ナポリのマント〕	yndig og duftende Krans af Roser og Liljer 〔バラとユリの 美しい芳香を放つ花輪〕

(＊テキストからの引用例を略した分)

4

その他： a) 触覚的な表現, b) 重量感, c) 花

感覚的な表現については、以上のように、視、聴、嗅の3つをあげたが、ただそれだけにとどまらず、その他2～3の項目をつけ加えることができる。それらは、a) 皮膚で感じる感覚, b) 物が重い軽いといった感覚、最後にc) 花に関する描写などであり、以下、各々をごく簡単に記述するにとどめる。

a) 触覚的な表現

フランシーネの性格描写に、皮膚の接触をさける、というところがある。まず、物語のはじめの方で、*Hun var i allerhøjste Grad tilbageholdende overfor Berøring.* (345) [彼女は極端なまでに接触することを自制する。] とあり、彼女が他の女性たちのように口づけや抱擁をしたことがないのだが、その彼女が物語の最後では、射たれて血まみれのマチーセンに、その素足にさわられるところがある。すると *Hun var færdig med sit Legeme.* (391) [彼女の体はもうおしまい。] という決定的な状況になる。彼女の美しかった、生き生きした様が、すっかり形相をかえるところは視覚的に人形がこわれたこと、色彩のなくなったことでも描写されたが (cf. 「詩人」にみるその文体(1)) ‘人形’ (xi) こわれた ‘人形’), 念を押すかのように、彼女自身がもう最後の段階に來た事を、触覚的な表現においても繰返していることがわかる。

その他、視覚的にも判断できないわけではないが、より皮膚に感ずることと強く確認できることは、‘ぬれた’ という感覚である。この表現は物語全体の各所に散らばっている。これは多くの場合、他の感覚表現と一緒に出て来る。例えば夜明け前の自然描写では (350), 色, 音, 光などにまじって用いられている。*vaade Græs* [ぬれた草], *vaade Syrenbuske* [ぬれたライラックの木]。その他 *et dugget og sølvhvidt Spejl* (362) [露にぬれた銀白の鏡], *dugvaade Majnætter* (363) [露にぬれた五月の夜], *dugvaad Græs paa Markerne* (377) [野原の露にぬれた草], *drivvaade, tunge, honningsøde Kløver* (378) [しっとりぬれて、重い、蜜のように甘いクローバ], *Begge mine Hænder var vaade af Dine Taarer* (382) [私の両手はおまえの涙でぬれていた] など、ここにその一部をあげたにすぎない。

b) 重量感

気が重いとか、軽くなったとかいう表現があるように、重いとか軽いと

いう感じは気分的なものである場合が多い。いやな人を訪ねたり、いやな話をしなければならぬ時、重い足をひきずって行くように感じ、また反対に重い物でも好きな人のところへ運ぶ時は、その重さが少しも気にならないなど、日常生活の中においてもこれらは珍しいという経験ではない。

Blixen はこういった重量感についても、多くの描写を試み、物語の内容と深い関わりをもたせている。

アナスはデンマーク農民出身者として重々しい動作——しかし優雅な——の持主として描かれている。Den tunge og langsomme Ynde i den unge Mands Holding…(346) [この青年の態度の中にある重々しくゆったりした優雅さ…。]。それに反して南欧からやって来たフランシーネは彼とは全く対照的に軽々とした感じを与える描写がなされている。

Det ejendommeligste hos hende var hendes Bevægelsers Lethed. Den var som en Fugls. (344)

〔彼女の中で最も特徴的なことは、その動きの軽やかさである。それはまるで、鳥の軽さである。〕

また、彼女のバレエをぬすみ見たマチャーセンは、バレエ用語でいう ‘Ballon’(344) についても彼女との関係で、その芸にすぐれた才のあることを述べている。

この2人の最初の出会いが教会の前で復活祭の日におこるのだが、マチャーセンは、この重さと軽さの出会いに大きな秘密があると考え、なぜか強い印象を受ける(346)。そして2人の間に何か起こる、と予感がするのである。

マチャーセンが結婚を待つ期間中、幸福感を満喫するが、そこでは…… indtil han svømmede og fløj i det Blaa (377) [彼が青(空)の中で泳ぎ飛翔するまで…。]と彼のうれしい気持を表している。先に、筆者はテキスト「翼」を分析したが、この題自身にも、Blixen の幸福感が満たされていたことが思い出させるのであるが、それとは反対に、苦しい重い気分は、「弟への手紙」の中にみられた。ここ「詩人」の中でも、アナスがフ

ランシーネに聞かせる言葉に “...Djævelskab, ... har negativ Vægt, ...” (382) 「悪魔は否定的重量を持っていて…」がある。‘われわれから離れたところで燃素が燃えればもえる程、われわれが重くなる。重い。それ以外には云いようがない’、と表現している (382)。これは疑惑や不幸を指しているものと思われる。

このように、Blixen は内的な感情、情緒とその度合、微妙な差異をも重い、軽いといった感覚的な表現を用いて読者に伝達してくるのである。それは、他の感覚的な表現では充分表現できない質のものであり、それなりに、Blixen にとっては、重量感もまた大切な感覚的表現の一つになっていることがわかる。

c) 花

花には色彩や形があり、香りもあることから、1の視覚的な表現に入れるべきが適当なのか、3の香りの項に入れるべきか決めたいが、昔から花だけがもつ象徴的な意味もあるので、一応別に取り扱うことにした。

花には、花言葉といったものがあり、各々の花が抽象的な意味をもたされてきた。例えば、ユリが貞操を表す、“som Kyskhedens Blomst” (373) といったようなことである。各国、各州（県）などでも1つの花を定めて国花（州花）と称したりする。イギリスがバラ、中国が牡丹、日本が菊といった風に。ちなみにデンマークの国花（木）はブナである。

この「詩人」の物語の中では、種々の花が登場してくる。それらが自然情景描写の中に出てくるばかりではなく、比喩的にも用いられている。

先ず、その種類は、バラ（赤・白）、水仙、ヨウラクユリ、けまん草、ライラック、ポプラの花、チューリップ、ジャスミン、ヒヤシンス、クロウバの花などであり、物語中、約20箇所わたって花について述べている。

その中で、バラについての関係描写が半数を占めていることは、この花の持つ象徴的価値、古くからの伝統、などによるものと思われる。デンマークではバラの咲く期間は長く、種類も多く、バラ園などは人々にことの

他、愛されるところである。生活の中でバラが占める位置は、実際的にもまた、象徴的にも大きく、バラの花を贈る時には必ずその背後に贈り主の表現したい感情や情緒を強く含ませている (cf. H. C. Andersen 「豚飼いの少年」の中でのバラ)。

この「詩人」の中でバラがどのように用いられているかを考察してみよう。

A：人間の体の部分、あるいは体つき、様子を若く愛らしく、美しいものとして表現していると思えるもの、B：人生の中で最も美しい出来事や思い出の象徴として用いられる場合、C：現実にはバラについて詩人アナスが詩をかき (343)、画家たちがそれをえがき (358)、結婚式の前日、バラを贈る (377) といった3つのグループに分けられる。以下では A と B のグループのみからいくつかの例をひいてみる。

A：

(i) rosenkindede Prinsesse (335)

〔バラの頬をした王女〕

15才の若さで、英国からやって来た Caroline Mathilde (1751—75) をさす。クリスチャン7世に嫁ぎ、後日一大悲劇をひきおこす女性である。

(ii) ...dens Rosenmund var nu ikke andet end sorte Huller i den hvide Flade. (390)

〔バラの口もと〕 (cf. 「詩人」にみるその文体(1)) ‘人形’ (xi) こわれた ‘人形’)

フランシーネの絶望した有様。

(iii) De holdt Deres venstre Haand op, som om det var en hvid Rose, og klippede den af, ... (376)

〔あなた（フランシーネ）は左の手をまるで一輪の白バラのように上げて、それを切り落した…〕

アナスが、自分のみた夢の中での有様を彼女に語っている。

(iv) ...var hendes Ansigt køligt og dugget i Natteluften, som en hvid Rose. (381)

〔…彼女の顔はまるで一輪の白バラのように夜の大気の中で冷たく露にぬれていた。〕

(v) Hun svajede lidt, hvor hun stod, som en bøjelig Rosengren, der har svært ved at bære Vægten af sine Roser. (381)

〔彼女はその場で、丁度自分の花の重みを支えかねたバラのしなやかな枝のようにちょっとゆらいだ。〕

B :

Denne forlængst forglemte Hændelse var en lille Blomst i hans Liv, i hans Livs Krans, ... Mon denne Nat vilde sætte en Rose i Kransen? (380)

〔このずっと昔に忘れてしまった出来事は彼の人生の花、彼の人生の花輪の中の小さな一輪、…はたして今夜、この花輪に一輪のバラをそえてくれるか。〕

今までの人生の花輪を飾っていたのは、小さな野草、忘れた草、すみれ、パンジーのようなものだったが、フランシーネとの結婚はバラにたとえられる立派で美しく、記憶すべき大きな出来事である、との意。

バラ以外の花々についても美しく、また詳細にわたる描写がみられるが、その中の1～2を取りあげてみよう。

- (1) Tulipanerne holdt betænksomt deres hvide og lyserøde
Bægre lukkede mod Natteluften. (350)

〔チューリップは物思いに沈んで、その白やピンクの花卉を夜の
大気にむけて閉じている。〕

チューリップの花を擬人化した描写であるが、ここでも花の状態を書く
にとどまらず、それが夜の大気を意識しているような書き方になっている
点が注目される。

- (2) Paaskeliljer, Kejserkroner og Diclytra——som man i Dan-
mark kalder Løjtenantshjerter, fordi de, naar man bøjer
Blomsterne fra hinanden, indholder en Champagneflaske og
en Danserinde——…(345)

〔ラッパ水仙，ヨウラクユリ，それにけまん草——花を両側から押
すと，その中にシャンペーンのビンと1人の踊り子がかくれている
ところから，デンマークでは将校のハートと呼んでいるのだが——
…〕

けまん草はまた デンマークでは‘日本のちょうちん’とも呼ばれる，ピ
ンクのハート形の花がいくつも1つの茎にぶら下っている草花であるが，
将校（中尉）たちの愛する飲物と女の子がそのハート形の花の中に入っ
ているとの想像はほほえましい。

視覚（色彩），聴覚（音），嗅覚（香りなど）と共に，触覚や重量感覚な
ど，われわれが具えもっている感覚のすべてに関する描写を試みることに
よって，Blixen は物語を進行させていった。これら感覚に関する表現は，
非常に莫大なものであり，1つのシーンが，ただ単独に視覚的な表現やそ
の他の表現で描写されるのではなく，あらゆる感覚的な表現を織りまぜて
内容をもり上げてゆく点が彼女の第一の特徴であり，それらがまた，内容

と比喩的に深く関わり合っていることも次にあげるべき特色であろう。

この作家が極めて鋭い感覚の持主であろうことは当然に考えられることであるが、その表現が繊細で、美しいこと、また想像力と洞察力に満ちていることは、彼女の文体を特徴づける極めて大きい要素となっていることは疑いのないところである。

Blixen が心の奥深くで経験した世界が、これらの多くの美しい感覚的な描写によって、「詩人」という1つの立派な織物にもたとえられる興味深い作品となって結晶したと云うべきであろう。

テ キ ス ト

Blixen, Karen: *Syv fantastiske Fortællinger*, Gyldendal, 1969. (1. Udg. 1935.)

“ : *Den afrikanske Farm*, Gyldendal, 1972. (1. Udg. 1937.)

参 考 文 献

I 事典・辞書

Gyldendals litteratur leksikon I—IV, 1974.

Litteratur leksikon, Folmer Christensen under medvirken af Lotte Eskelund, Gjellerup, 1969.

Ordbog over det danske sprog 1—27, Det Danske Sprog- og Litteraturselskab, Gyldendal, 1918—1956.

Nudansk ordbog 1—2, Lis Jacobsen og andre, Politikens Forlag, 1967.

Retskrivningsordbog, Dansk Sprognævn, Gyldendal, 1966.

Synonymordbogen. Danske synonymer i skrift og tale fra Holberg til i dag, redigeret af Allan Karker, Politikens Forlag, 1973.

II 文学史, 作品集

Dansk litteratur historie I—IV, Politikens Forlag, 1971. (Karen Blixen: IV 195—210)

- Danmarks litteratur*, Brøndsted & Møller Kristensen, Gyldendal, 1963.
- Håndbog i dansk litteratur* 1—3, Vagn Falkenstjerne og E. Borup Jensen, G.E.C. Gads Forlag, 1969. (Karen Blixen: af 'Den afr. Farm', 290—294)
- An Introduction to Scandinavian Literature*, Elias Bredsdorff, Brita Mortensen, R. Popperwell, Ejnar Munksgaard, 1951. (Isak Dinesen, 176)
- Dansk litteratur. En tosproget antologi*, F. J. Billeskov Jansen, Fujio Makino, Tokai Univ. Press, 1976. (Karen Blixen: 'Sorg-Agre', 424—499, [悲しみの土地])
- Ideas and Ideologies in Scandinavian Literature Since the First World War.* Edited by Sveinn Skorri Höskuldsson. Univ. of Iceland, Institute of Literary Research, Reykjavik, 1975. (Karen Blixen, 18)

III デンマーク語及び文体

- Albeck, Ulla: *Dansk Stilistik*, Gyldendal, 1939.
- Diderichsen, Paul: *Elementær Dansk Grammatik*, Gyldendal, 1966.
- Kobayashi, Hideo (小林英夫): *Buntairon no Kensetsu*, 『文体論の建設』 Misuzu Shobo, Tokyo, 1975.
- Hansen, Aage: *Moderne Dansk*, udgivet af Det Danske Sprog- og Litteraturselskab, Grafisk Forlag, 1967.
- : *Sprog i Sproget*, Gyldendal, 1964.
- : *Vort vanskelige Sprog*, Grafisk Forlag, 1965.
- Hansen, Erik: *Sprogiagttagelse*, Gjellerup, 1964.
- : *Sprogets Mekanisme*, Gjellerup, 1974.
- Hohwy, Henning: *Sætningsbygningsproblemer*, Nyt Nordisk Forlag Arnold Busck, 1968.
- Jensen, E. Ottar: *Dansk Grammatik for Gymnasiet*, G.E.C. Gads Forlag, 1967.
- Karlsson, Henry: *Dansk Sproglære*. Håndbog for Gymnasiet, G.E.C. Gads Forlag, 1964.

- Lomborg, B. Brøchner: *Praktisk dansk analyse af formålære*, P. Haase & Søns Forlag, 1961.
- Nordentoft, Annelise Munck: *Hovedtræk af dansk Grammatik. Syntaks*, Gyldendal, 1970.
- Oxenvad, Erik: *Bedre dansk*, Hans Reitzel, 1962.
- Rubow, Paul V.: *Saga og Pastiche*, Gyldendal, 1923.
- Salling, Agge: *Lær at tale dansk*, Grafisk Forlag, 1964.
- Schiødt, Hans Jørgen: *Dansk Sprog og Stil*, Gyldendal, 1965. (K. Blixen: af 'Vejene omkring Pisa', 93—94; af 'Alkmene', 106)
- Walshe, M. O'C.: *Introduction to the Scandinavian Languages*, Andre Deutsch, London, 1965.

IV Karen Blixen とその作品について

- Anderen, Hans & Lasson, Frans: *BLIXENIANA* 1977, Karen Blixen Selskabet, 1977.
- // —— : *BLIXENIANA* 1978, Karen Blixen Selskabet, 1978.
- Andersen, Hans: "Death is Nothing, Winter Nothing", *◊DANISH JOURNAL* 78/1975.
- Beard, Peter: *LONGING FOR DARKNESS: "KAMANTES TALES FROM OUT OF AFRICA."* Harcour Brace Jovanovich, New York & London, 1975.
- Bjørnsen, Mette Koefoed & Hansen, Erik: *Facts about Denmark*, (K. Blixen: 25—26) Politikens Forlag, 1972.
- Ejønvig, Thorkild: *Pagten*, Gyldendal, 1974.
- Brix, Hans: *Karen Blixens Eventyr*, Gyldendal, 1949.
- Carlsen, Caroline: *Erindringer om Karen Blixen*. Fortalt til Frans Lasson, *BLIXENIANA* 1976, Karen Blixen Selskabet, 1976.
- Det Danske Akademi: *Det Danske Akademi* 1960—67, G.E. C. Gads Forlag, 28. november, 1967. (241—318)

- Dinesen, Thomas: *Boganis, min fader, hans slægt, hans liv og hans tid*, Gyldendal, 1972 (26, 82.)
- " — : *Tanne, Min Søster Karen Blixen*, Gyldendal, 1974.
- Dinesen, Wilhelm: "Boganis" Jagtbrev, (Gyldendals Bibliotek 44, *DANSKE ESSAYS*, 92—96), Gyldendal, 1972.
- Friis, Oluf: tilegnet, *Indfaldsvinkler* ("Amphitryon 39" af Pil Høgsbro Dahlerup om Karen Blixen: Alkmene, 98—113.) Gyldendal, 1964.
- Hannah, Donnald: *Isak Dinesen-Karen Blixen, The Mask & the Reality*, Putnam & Co., London, 1971.
- Henriksen, Aage: *Det guddommelige Barn og andre essays om Karen Blixen*, Gyldendals Uglebøger, 1970.
- " — : *Guder og Galgefugle*. To Essays om Karen Blixen, Det Norske Studentersamfunds Kulturutvalg, Oslo, 1956.
- Henriksen, Liselotte: *Karen Blixen-Isak Dinesen. En Bibliografi: A Bibliography*, Gyldendal, 1977.
- Johannesson, Erik O.: *The World of Isak Dinesen*, Univ. of Washington Press, Seattle, 1961.
- Jørgensen, Aage: *Isak Dinesen, Storyteller*, Akademisk Boghandel, Aarhus, 1972.
- Kabell, Aage: *Karen Blixen debuterer*, Wilhelm Fink Verlag, München, 1968.
- Kristensen, Tom: *Kritiker eller Anmelder*, Gyldendals Uglebøger, 1966.
- Langbaum, Robert: *The Gayety of Vision. A Study of Isak Dinesen's Art*, Chatto & Windus, London, 1964.
- Larsen, Finn Stein: *Prosaens mønstre*, Berlingske Forlag, 1971. (Karen Blixen : af Sorg-Agre, Signatures sprog, 128—142)
- Lasson, Frans & Svendsen, C.: *The Life & Destiny of Isak Dinesen*, Random House, New York, 1970.
- Migel, Parmenia: *Titania, the Biography of Isak Dinesen*, Random House, New York, 1967.
- Nielsen, Harald: *Karen Blixen*, Studie i litterær mystik, Borgen, 1956.

Riisager, Vagn: *Karen Blixen*, Gyldendal, 1952.

Rosendahl, Johannes: *Karen Blixen*. Fire foredrag, Gyldendal, 1957.

Salomonsen, Finn, & Larsen, Carl Syrach: *Karen Blixen og Fuglene*, Rhodos, 1964.

Svendsen, Clara: *Notater om Karen Blixen*, Gyldendal, 1974.

Trzebinski, Errol: *Til sidst taler tavsheden*, En skildring af Denys Finch-Hattons liv og hans forhold til Karen Blixen, Lindhardt og Ringhof, 1978.

With, Merete Klenow: *Karen Blixen*, Et Udvalg, af Dansklæreforening, Gyldendal, 1964.